様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年４月１５日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：19720105
研究課題名（和文）　形式名詞の文法化に関わる日本語の構文構造史的研究

研究課題名（英文）　The Grammaticalization of Formal Nouns in Syntactic Structure of Japanese

研究代表者
宮地　朝子（MIYACHI ASAKO）
名古屋大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：10335086

研究代表者の専門分野：日本語学
科研費の分科・細目：日本語史
キーワード：名詞、文法史、助詞、助動詞、とりたて、非存在文、叙述

１．研究計画の概要
現代日本語のとりたて助詞（ダケ・クライ…）や文末のモダリティ形式（ハズ（ダ）・モノ（ダ）…）に見られる形式名詞類の機能語への体系的参与を「形式名詞の文法化」ととらえて考察する。形式名詞がいかに「名詞」の範疇を脱し（あるいは脱せずに）文法的機能を獲得するのか。また日本語の構造のいかなる側面がこの変化を支えるのか。名詞に関わる構造的条件に加え、再分析・類推をもたらす意味的条件に、言語外的条件・語用論的条件を統合した理論的説明を目指す。

２．研究の進捗状況
これまでの研究により得た知見を成果に基づいてまとめると以下の通りである。
(1)特に相対名詞に関し、名詞句としての文中での機能の多様性について未解明の点が多い。名詞研究として再検討の必要がある。
(2)個別の形式名詞の歴史的変化について、従来の研究では不十分な個別事例の精査を実践した。
①「筈＞ハズ(ダ)」「分け＞ワケ(ダ)」の文法化の過程には、連体修飾節の個別具体から抽象一般への当該名詞句の指示性の拡張が観察でき、「叙述」の構造を持つ非存在文・否定文やコピュラ文、「指示詞＋形式名詞」句といった構文的環境とその環境での名詞句としての指示の曖昧性（および再分析）が文法化の原動力であると考えられる。
②仮説①は付加的連用句由来のホカ・カギリ・ダケについても援用可能である。
③ホカ・ダケの分析によれば、形式化以前の個別の語彙項目としての制約が、形式化それ自体を含む変化の過程や条件に大きく関与している。中央語と地方語の言語接触や、対立する語彙項目の変化も捨象できない要因であり、ある変化の様相が一般的な現象か個別的な現象かの見極めにおいて留意される。
(4)言語形式の共時的諸用法の発現を説明する枠組みとして、語用論的側面からの分析が示唆的である。例えば「デス・マス」形式は、発話場面や聞き手の条件等の語用論的条件に加え、その条件を制限としつつ行われる話者の操作性によって説明できる。この語用論的枠組みは、言語形式の共時的多様性のみならず歴史的な機能拡大の説明にも親和的である。
(5) 構造的側面に関し、助詞化した形式名詞の多くが構成する「とりたて句」について「叙述」の主語位置とみることができる。主語句と述語句が構造的に姉妹関係をなす叙述構造は日本語の基盤的構造の一つといえ、名詞句の付加句から主語句への再分析による文法化の構造的基盤ともなる。叙述の一としての（非）存在文が文法化の環境となる蓋然性も指摘できる。

３．現在までの達成度
②おおむね順調に進展している。
理由
　学会発表４件、論文４件（うち査読有２件）、図書４件（うち 3 件は論文集にて分担執筆、2 件は印刷中（2010 年度中に刊行予定））の成果をあげた。最終年度前年度申請により基盤研究（C）として採択され、発展的課題として継続的な取り組みを認められた。

４．今後の研究の推進方策
　主にホカ・ダケの追究により、文法化した

形式名詞の振る舞いには、形式化以前の名詞の語彙的な制約が大きく関与していることが明らかとなった。これに照らせば、上述の仮説は新知見ながら必要条件の提示に留まり、変化の蓋然性を説明するには再検討と補強の余地が大きい。

本研究課題は「名詞の形式化＞文法化」という把握のもと、個別名詞の語彙項目としての条件・制約、普遍・一般としての構造的条件・制約、語用論的条件・制約さらに言語外的要因の相互作用としての説明を目指して再設定する必要がある。形式化する名詞の諸類型は、極性やこれと連動する構文構造のタイプによって整理可能であり、文法化の類型もこれに対応すると予測できる。当初計画の実践によって導かれたこの新たな問題設定により、当初の目的と意義に適うのみか、より精度の高い成果を得られると考える。

以上の方針に基づく最終年度前年度応募により、基盤研究（C）「名詞の形式化・文法化にみる日本語の構文構造史」（課題番号22520464）として採択された。発展的研究として継続的に取り組んでいく。

５．　代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①「ほか」の諸用法と名詞句の多様性，宮地朝子,『名古屋大学文学部研究論集』, 査読有, 166（文学 56），1-18，2010 年 3 月.
②「筈からハズへ、訳からワケへ―名詞が文法化するとき」，宮地朝子，名古屋大学文学研究科公開シンポジウム報告書『拡張し変容する日本語』，査読無，名古屋大学文学研究科，4-16，2007 年 6 月.
③「共在性からみた「です・ます」の諸機能」，宮地朝子，北村雅則，（他 4 名，第一著者），『自然言語処理』（特集号：感情・評価・態度と言語），査読有，Vol.14 No.3，言語処理学会，17-38，2007 年 4 月.

〔学会発表〕（計２件）
①「日本語の「とりたて」と叙述、その構造条件」片岡喜代子，宮地朝子，日本言語学会第 139 回大会,2009 年 11 月 28 日,神戸大学. 審査有.

〔図書〕（計２件）
①宮地朝子，開拓社,「日本語否定文と文法化―シカ類の変化と変異を中心に」加藤泰彦ほか編『否定と言語理論』，170-192，2010年刊行予定.
②宮地朝子，和泉書院,「ダケの歴史的変化再考―名詞の形式化・文法化の諸条件」田島毓堂編『日本語学最前線』，425-446（全 754 頁），2010 年 5 月.
③宮地朝子，ひつじ書房,「形式名詞の文法化―名詞句としての特性から見る―」青木博史編『日本語の構造変化と文法化』，1-31（全 247 頁），2007 年 7 月.